

## を 読 む

河合文化教育研究所 主任研究員 丹羽健夫

**先** 生、今年、定時制に希望したら、柏木高校に行かされるでえ。行ったら大変やで、<sup>やから</sup>輩が待ち受けてるでえ」

**関** 西では、不平を言ったり、相手の揚げ足を捉えて口論をふっかけたりすることを「輩を言う」と表現し、そのような者たちを輩と呼ぶ。

**同** 僚にこう忠告されながらも、柏木高校に着任し担当したクラスに、輩は居た。しかも2人だ。2人はつるんで（あっ、いかん）結託して、さまざまな「悪事」やいやがらせを働く。

**輩** Aが「先生、廊下、汚いやろ。俺らで、きれいにするわ」というので半信半疑でいたところ、案の定、洗面所のママレモンを撒き散らし廊下を泡だらけにしてしまう。

先生「今日の日直、誰やった？」

輩A「はあ？ 俺らや」

先生「そうか。じゃ、黒板、消しといてくれるか？」

輩A「なんてえ？ それ、誰書いたんや！」

先生「俺や」

輩A「<sup>おのれ</sup>己がしたことぐらい、己で始末せんかい」

しかし先生も負けてはいない。

輩B「おい、岩本（先生の苗字）百円やるさかい、ジュース買って来い」

先生「悪いなあ。二百円やったら行くねんけどなあ。百円では行けへんなあ」

輩B「おっ、やるやんけ」

制服廃止の決定で「もどせ！ 制服にしろ！」と叫んで狼狽する輩たちが笑える。

**そ** んな輩たちは昼間働いている。だから夜間定時制に来ているのだが。その仕事ぶりを先生は見に行く。

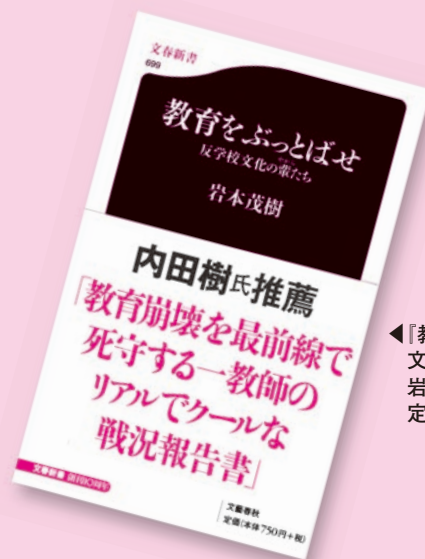
**ま** ず、Aが勤める辻建設の仕事現場に足を運んだのは、九月初旬の暑い日のことであった。道路での下水工事でAは七十歳を超えた働き手を庇いつつ、四十前後の監督から偉そう

に言われても『はい』と従順に従いながらテキパキと仕事をこなしていた」

**そ** んな輩も、先生が家を修理してもらっているが、「工事人たちが、こちらの言うようにやってくれない」とこぼすと、Aは「あんた施主だろう。言うとおりにしろと言ってやれ。ただクレームは仕事人に直接言うな。現場監督に言え。俺たちでも腹が立って、わからんように手を抜くからな」と変な助言をしてくれる。

**1** 990年代半ばの、著者が体験した高校の話である。上記のような生易しい「悪事」ばかりではない。ときには背筋も凍るような話も出てくる。一種の異界といっても言い過ぎではない。そうした中で著者は「ただ、彼らの語りに耳を傾け、異質と見えた彼らの文化の文法を学ぼうとする姿勢が、唯一このゲリラ的コミュニケーションに心を通わせる機会を生み出す」

**教** 育的」というよりも「お互いに出会う」ということに活路を見出していこうとする。教育の現場に多くを考えさせる、面白いが重い作品である。



◀『教育をぶっとばせ—反学校文化の輩たち』  
文春新書699  
岩本茂樹 著  
定価 本体750円＋税